



生活やものづくりの学びNetニュース

巻頭言

「ものづくり」の力 再考

日本家庭科教育学会会長

和洋女子大学総合研究機構家庭科教育研究所

工藤由貴子

学校教育には、一人ひとりの子どもの生涯発達を可能な限り豊かに充実させるという大きな目的がある。生涯発達とは、人間が自分の可能性に向かって自己を完成し続ける過程のすべてを含む、生涯にわたる多様な発達の姿である。家庭科は、生涯を見通した生活という時間的な広がりを見野に収めており、子どもたちの生涯発達と深くかかわっている。

その生涯にわたる発達の原動力となるのが、進んでまわりの環境に働きかけ、相互作用を行う生活の主体性である。受け身の姿勢で変化を待っているだけでは、生涯発達は望めない。自ら変化しながら、再び新たな課題をもって環境に向き合う、自分で自分を進化させる活動であり、まわりの環境と相互作用をする行為の連続がその源泉となる。このように考えると、学校教育における「ものづくり」は、人間の生涯発達に関わって根源的な意味をもつ活動であると筆者には思える。

それぞれの「ものづくり」には、例えば便利さや快適さの実現といった合理的な目的があろうが、その根底には「ものづくり」を通して環境への主体的な働きかけをすること、調理実習や被服実習でいえば、食材や布に働きかける行為そのものが人間の発達にとってかけがえのない活動であるという共通認識をもつことができる。技術革新著しいバーチャルライフを生きる子どもたちだからこそ、自分の身体で、手で、「ものづくり」を通して直接に環境と相互作用することの意味は大きい。

それはどのような教育的働きかけによって可能になるのだろうか。大事なことは、子どもたちが自発的な興味に突き動かされて主体的に動くことであり、目的を固定化しないこと、教師側の提供する目的に受動的に応えるような体験にしまわれないことである。「ものづくり」をデザインする子どもたちの自発的な発想を大事にしつつ、基本的な枠組みを提供する、そこから子どもが何を得られるかは、教師のものづくりに対する本質的理解にかかっている。

一方で、子どもの自発的な発想を大事にしつつも、基盤となる知識やスキルの提供は必須である。それを提供するのには学校という場において他にない。学校は、子どもたちが知識と実践との往還をしながら知識の断片を自分の中に統合していく場であり、外ではできない失敗が許される安全な場所であり、試行錯誤しながら粘り強さ、やりきる力を身につける場所として他にはない機能をもつ。

そして、学校教育の課程で行われる「ものづくり」で得た力は、それ以降の子どもたちの生きる力、社会との関わり方の基盤となってくれるはずである。学校で経験できる「ものづくり」は、ほんの数回に限定されるかもしれないが、その体験が本質的なものであり、長い人生を生きる間に何度も子どもたちの記憶に蘇り、常に勇気や喜びをもたらすような何かであってほしいと切に願う。

Contents

巻頭言1
報告 生活やものづくりの学びネットワーク 秋のフォーラム2~6
事務局からのお知らせ7
「2024 年度 春の学習交流会」のご案内8

—学校と地域との連携にみる生活体験、
ものづくり体験の学習効果と課題—

コーディネーター 鈴木明子 (広島大学)

1 フォーラムの趣旨と概要

学校の抱える課題が多様化かつ複雑化する中、学校だけではなく地域や社会全体で子どもたちの成長を支え、見守ることが求められています。学習指導要領(2017・2018)でも、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、地域と連携・協働しながら子どもたちに必要な資質・能力を育成することが強調され、いわゆる「社会に開かれた教育課程」の実現が目指されています。子どもたちや地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する学校教育目標を達成するためのカリキュラム・マネジメントを構想、実現するために、教師自身が地域連携活動の意義について体験を通して考えることが必要です。

そこで、本フォーラムでは、広島大学教育学部で中学校技術科の教員養成に関わり、木育の普及をリードされている木村彰孝氏に、地域連携実践の事例を紹介していただくとともに、学校と地域との連携のための仕組みづくりを考える場をいただきました。また、上越教育大学で教員養成に関わり、地域課題に向き合うことができる学生を育てる教員養成カリキュラム構築を追究されている佐藤ゆかり氏には、上越市高田地区の雁木町家における地域連携活動の詳細を紹介いただき、教員養成の環境作りについて考える機会をいただきました。両氏のお話から、扱う活動内容は異なるものの、学校と地域との連携のための環境づくりにおいて、多様な組織や既成の社会活動や文化との連携を活用することが有効であることを改めて認識しました。また、学校カリキュラムや各教科のカリキュラムの中で、さらには大学の教員養成カリキュラムの中で、地域連携活動にどのような意味、意義を持たせるのか、それを関係者で検討、共有することの大切さにも気づかされました。

2 学校と地域との連携のための環境づくりの工夫

木村氏から、大学と青少年自然の家(国立)がそれぞれの専門性を活かしながら協働して展開した活動が紹介されました。小学校の集団宿泊活動と学校で実施する事前・事後学習に関連を持たせた木育プログラムの事例です。また、この活動は県緑化推進協会との連携による木育キャンプに発展し、大学と植物公園との連携による問題解決を取り入れた木育プログラムの開発と実践にもつながりました。さらに、木育の担い手を育成する取り組みとして、木育普及委員会を企業と共同で立ち上げ、教育関係者を含む一般を対象とした「ひろしま木育アカデミー」と、受講者の活躍の場を提供する「ひろしま木育担い手バ

ンク」、大学生を対象とした「大学生が考える未来の木育」を開催したことも報告されました。このようなダイナミックな環境づくりは、学校や教師に、多様な連携のための有効な情報を提供することにつながります。

一方佐藤氏は、共創拠点の推進の方向ではなく、教員養成課程の学生にとって地域理解や連携能力が重要な課題であることから、大学における教育研究活動として地域連携を位置付けたいと考えていることに言及されました。具体的には、小学生を対象に、放課後、教員と大学生が協働で実施するものづくりや生活に係る体験的活動の場を雁木町家の空き家を拠点として約半年開設したことについて報告いただきました。すでに地域に根付いている文化や物理的環境を活用することによって、将来教員になる大学生が地域と連携する資質・能力を高めていく教育環境づくりの工夫がみられました。

3 学校カリキュラムや教員養成カリキュラムにおける地域連携活動の意義

木村氏の提案する中学校技術科のカリキュラムは、内容 A～D を統合した問題解決の題材(大題材)「地域の人を支えるフェーズフリーな公園を提案しよう」と各内容のテーマ(A 安心、B コミュニティの形成、C 災害、D 防災・防犯)別に解決する題材(小題材)を設定したものでした。汎用的な学びにつながる効果と地域の多様な専門家との連携によって、より深い学びを得ることができると考えられます。

佐藤氏からは、教員養成カリキュラムの年間スケジュールに、地域連携活動を位置付け、アートやものづくりの活動、生活の営みに係る体験的活動を軸にして組立てた報告をいただきました。学生は、活動を先人の知恵や生活の文化を子どもが学習する大切な機会と捉えていました。活動は学生自身が生活や学習内容や方法について学ぶ機会でもあり、地域や生活の捉え直しの機会として位置付くものであったと思われます。活動メンバーは美術教育、技術科教育、特別支援教育、家庭科教育の教員と学生で、教科連携の意義も見られました。

このように、地域連携活動は、各教科の有効なカリキュラムづくりに役立つとともに、教員養成においても教師としての資質・能力の向上につながるものと考えられます。関係者が、よりよい学校文化を共に構築する意識をもって教育活動の推進に協力していくために、木村氏、佐藤氏からいただいた情報はとても有効なものでした。参加者の皆さんと協議する中で、それぞれの立場で地域連携活動を捉え、自身ができる可能なことを考える場となりました。(文責 鈴木 明子)

1 はじめに

現行の学習指導要領では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現が目指されています。その実現のための第一歩は、教師が地域の人的・物的資源を知ること、学校が抱える課題を地域と共有することではないかと考えます。

本講演では、私の中学校技術科と木育に関する研究、実践の事例を地域との連携の視点から示すことで、学校と地域の連携の可能性を考えることを目的としました。

2 中学校技術科における地域との連携を考える

経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会を目指す Society 5.0 の実現と複雑化・高度化した科学技術を適切に評価し、行動するためには、リスクの視点（リスクアセスメントとリスク低減）から現実社会の広く高度な問題を様々な視点から分析し、将来を見据えたトレードオフの視点で適切に評価・判断する能力が必要不可欠です。このような能力と中学校技術科の目標・内容は類似性が高く、効果的な教育が期待できます。

中学校技術科は4つの内容「A 材料と加工の技術」「B 生物育成の技術」「C エネルギー変換の技術」「D 情報の技術」で構成されており、学習指導要領の内容の取扱いにおいて「ウ 第3学年で取り上げる内容では、これまでの学習を踏まえた統合的な問題について扱うこと。」と示されています。この統合的な問題解決について、一般的には内容Dと内容A・B・Cのうち1つを組み合わせた1つの製品やシステムの設計・計画、製作・制作・育成に取り組まれることが多い現状にあります。しかし、現実社会で行われている問題解決は、1つの製品を通じた設計・計画と製作・育成といった狭い問題解決のみではなく、複数の製品・作物で構成されている場所やシステムのような広い問題解決が多く行われています。

以上の課題を踏まえて、本研究では中学校技術科において生徒にリスクの視点から現実社会の幅広い問題を解決する能力を育成することを目的に、リスクの視点と4つの内容を統合した問題解決を取り入れた中学校技術科のカリキュラムを提案しました¹⁻³⁾。なお、本研究はJSPS 科研費 JP20H01681 の助成により行いました。

提案したカリキュラムの全体像を図1に示します。本カリキュラムでは、4つの内容を統合した問題解決の題材（大題材）「地域の人を支えるフェーズフリーな公園を提案しよう」と内容A~Dにおいてテーマ（A 安心、B

コミュニティの形成、C 災害、D 防災・防犯）と解決する題材（小題材）を設定しており、幅広い立場や専門的な内容が含まれています。そのため、地域の専門家と連携することでより深い学びを実現できると共に、教員の負担軽減にも繋がると考えています。例えば、大題材を取り扱う場面では、自身を開発者と設定し、公園の設計・施工会社などと連携する、加えて、設置者として役所、管理者として役所、管理を担当している個人・団体、使用者として地域の住民、幼稚園・保育園、小学校などを対象に調査を行うことなどを通して連携することが考えられます。また、小題材「B. 花で地域の心に輪を作ろう」では、自身を花の生産者と設定し、花に関する専門家である農家や大学等の高等教育機関、公園を利用するあるいはイベントを企画している地域の団体を対象に地域のニーズを調査するといった連携も考えられます。

本カリキュラムでは、大題材と4つの内容のテーマを踏まえ、実践する地域の特性に応じた小題材を設定することも考慮した大題材と4つの内容のテーマを設定しており、地域の人材を活かした小題材を設定し、授業を実践することも可能です。

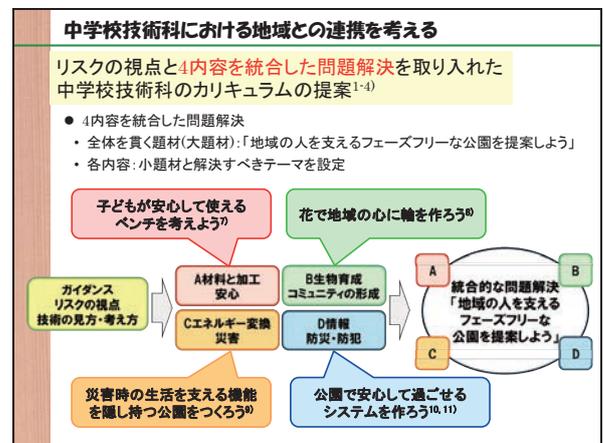


図1 提案したカリキュラムの全体像

3 木育における地域との連携を考える

木育は2004年度に北海道において発足した「木育推進プロジェクト」の中で検討され、生まれた言葉です。その後、2006年9月に閣議決定された森林・林業基本計画において初めて木育の推進が明記され、最新の森林・林業基本計画においてもその推進が明記されています。

3.1 地域と連携した木育の実践例

国立諫早青少年自然の家（長崎県）との連携し、集団宿泊活動における木育プログラムの開発と実践を行いました⁴⁾。本実践は、森林と木材について体験的な活動を通して正しく理解し、人と森林・木材の関わりを客観的に考え、主体的に行動することのできる能力や態度を育成

することを目的としました。小学校の5年生を主な対象に、森林に囲まれた施設で実施されることの多い集団宿泊活動とその前後に学校で実施する事前・事後学習に関連性を持たせた木育プログラムとしました。実践した木育プログラムの概要を図2に示します。内容は、川上(植林・手入れ)から川下(利用)までを、ものづくりなどの体験的な学習活動を通して系統的に学習できるものとなりました。例えば、集団宿泊活動の活動「森のハウスづくり」の材料に丸太を加え、切断等を通して模擬的な間伐を体験する、集団宿泊活動の活動に「森林の役割探し」「木製品探し」を取り入れ、森林の機能や木材の特徴を生かしたものづくりについて気づかせる活動を取り入れました。本実践では、大学と国立諫早青少年自然の家がそれぞれの専門性を活かしながら協働して進めました。

本実践を踏まえ、小学校5・6年生を対象に、学校外での活動として、長崎県緑化推進協会、国立諫早青少年自然の家との連携による木育キャンプも実践しました⁵⁾。

また、広島市植物公園と連携し、問題解決を取り入れた「木育」プログラムの開発と実践を行いました⁶⁾。箸の問題解決を通して森林と木材について知り、今後の生活に生かそうとする態度を育成することを目的に、学校外での活動として行いました。実践した木育プログラムの概要を図3に示します。実践では、広島市植物公園が箸の材料とした樹木の解説を担当するなど、大学と広島市植物公園がそれぞれの専門性を活かしながら協働して進めました。

講演の中では、上記以外に広島県立呉商業高等学校での木育の実践についても紹介しました。

3.2 地域と連携して木育の担い手を育成する取り組み例

木育をより身近なものとする、地域の森林・木材・教育の専門家と木育を繋げる活動として、木育の担い手を育成する取り組みを行っています。広島県内における木育の普及・促進を目的とした任意団体「木育普及委員会」を県内の企業と共同で立ち上げ、広島県内の教育関係者を含む一般の方を対象とした「ひろしま木育アカデミー」と受講者の活躍の場を提供する「ひろしま木育担い手バンク」、大学生を対象とした「大学生が考える未来の木育」を開催しています。例えば、「ひろしま木育アカデミー」は、川上から川下までを含む木育の基礎的な知識・技能と実践力の育成を目指し、人工林の手入れからものづくり、木育プログラムの作成と実践、などを取り入れたセミナーを開催しています。詳細はHP⁷⁾をご参照ください。

木育における地域との連携を考える			
1. 国立諫早青少年自然の家(長崎県)との連携—リーフレットの開発と実践— ¹²⁾			
各学校で実施する事前学習、事後学習、森林に囲まれた施設で実施されている集団宿泊活動での野外活動での学習内容を予定			
学習内容	プログラムでの学習内容	学習内容	
森林	日本・世界・長崎の森林面積・森林率	日本と世界の森林	日本・世界・長崎の森林面積・森林率
	森林の機能	森林の大切な役割	森林の機能
	天然林と人工林の違い(樹種、蓄積量・齢級別面積の推移)	森林の種類	天然林と人工林の違い(樹種、蓄積量・齢級別面積の推移)
人工林の循環利用	まわる人工林	人工林の循環利用	
木材の利用	木材の利用	木材のひみつ	木材の性質・特徴
	木材の性質・特徴		
集団宿泊活動	森林	森林の役割探し	森林の機能
	森林	人工林の観察	天然林と人工林の違い
	木材	木製品探し	木材の利用(人工林の循環利用)
事後学習	森林	丸太でのものづくり	木材の性質・特徴
	木材	森林と木材・木製品についてまとめよう	天然林と人工林の違い
	木材	まとめたいことを伝えよう	木材の性質・特徴
まとめ	木材を用いたものづくり	木材の利用	木材の性質・特徴
まとめ	私たちにできること考えよう		-

図2 国立諫早青少年自然の家との連携により実践した木育プログラムの概要

木育における地域との連携を考える			
3. 広島市植物公園との連携—問題解決を取り入れた「木育」プログラムの開発— ¹⁴⁾			
木育プログラム			
対象	広島県内の小学校4~6年生	木育的	問題解決的
期日	1日のプログラム	ステップ	プロセス
参加者	3~4人のグループ活動		
活動のテーマ	活動のテーマ		
活動の目標	「はし」から見える木の世界		
活動の目標	自分の食生活にあった安全で使いやすい「木のはし」をデザインし、作る!		
プログラムの目標	箸作りの体験を通して、森林と木材に関する内容を知る・気づく、また関連する知識・技術と問題発見・解決の視点を今後の生活に生かそうとする態度を養う		
製作題材	課題が理解しやすい		
製作工程	工程がシンプルで木工具をしっかり体験できる		
木材の特徴	木材の特徴を多く生かすことができる		
	箸の設計・製作		

図3 広島市植物公園との連携により実践した木育プログラムの概要

4 おわりに

これまで、地域と連携して実践を進めるに際し、学校が情報を知らない・入手できない、地域の専門家の情報が学校に伝わっていない、専門家まかせになってしまう、などの様々な課題に直面したり、見聞きしたりしました。今後、両者の連携を前進させるためには、学校と地域が気軽に連携できる仕組みづくりが必要と考えます。

私自身、今回の講演を通して自身の研究・実践が地域との連携に繋がっているのか、繋げていくことができるのかを見つめ直すきっかけとなりました。今回、貴重な場をお与え頂きました企画・運営をご担当の皆様にご感謝の意を表すると共に、ご参加頂いた皆様が生活体験やものづくり体験を通じた学校と地域との連携の可能性を考える、実際に動いてみるきっかけとなれば幸いです。

【参考文献】1) 岩崎ら：日本産業技術教育学会第67回全国大会講演要旨集、p.114 (2024)、2) 鎌田ら：前述と同一、p.115 (2024)、3) 倉元ら：前述と同一、p.116 (2024)、4) 木村ら：日本産業技術教育学会第29回九州支部大会講演要旨集、pp.47-48 (2016)、5) 蔦ら：テクノロジー教育、10、pp.8-15 (2020)、6) 木村ら：日本産業技術教育学会第65回全国大会講演要旨集、p.99 (2022)、7) 木育普及委員会 HP：<https://mokuiku-hiroshima.studio.site> (2025年2月5日確認)

「教員養成と地域連携を考える

－雁木町家を活用した地域連携活動－

佐藤ゆかり(上越教育大学)

1 はじめに

国立の教員養成大学・学部ならではの地域課題に対応したコースやカリキュラムの構築等が求められています。教員養成系大学の家庭科教育担当者として、このことをどのように考え、何を、どのようにおこなっていったらよいのでしょうか。本稿は、この問いを発端として実践している地域連携活動に関する報告です。

2 地域と教育をめぐる

地域の教育力の低下や、地域コミュニティ機能の強化の重要性が指摘されています。共働き家庭やひとり親家庭の増加、地域のつながりの希薄化など、家庭を取り巻く環境は一層変化し、子育てに不安を持つ保護者が多い等もいわれており、地域全体で家庭教育を支えることの重要性が高まっているといわれています。また、子どもをめぐる「現場・現物・現人間」の経験の不足、「農」からの遊離した社会における自然体験・生活体験の少なさや体験格差の問題等が報告されています。

地域と学校の連携・協働体制の構築の取組の一つとしてコミュニティ・スクール構想があるといわれていますが、自治体間・学校種間で差が生じていることが指摘されています。文部科学省は、コミュニティ・スクール構想の魅力を豊かな心が育まれること、地域の担い手としての自覚が生まれ、地域のネットワークが形成されることにより、地域づくりの輪が広がっていくこととし、企業やNPO、大学等が教育活動等に参画することで、その専門性を生かし、社会的な信頼の向上につながる等としています。つまり、大学には専門性をいかし、地域のネットワークに参画することが期待されているといえます。

他方、地域課題や社会問題等をどのように考えてその改善等にどのように取り組んでいくかの視点は家庭科教育を担当する者として欠かすことのできないことと考えます。たとえば、有形・無形文化等の保護や継承、また、現代の社会問題とされる家庭や地域における教育力の変化等をどのように考え、その改善等にどのように取り組んでいくか、地域の課題に向き合い子どもと共に考えて行動できる教員をどう育てていくかが求められると考えられるのです。

2 雁木町家における地域連携活動

(1) 上越市高田地区の雁木町家

本報告の地域連携活動は新潟県上越市高田地区での実践です。ここは江戸時代には「この下に高田あり」という立て看板がされたと伝えられているように降雪量の多さで知られている地域です。市街地には、町家と呼ばれ

る住居が立ち並んでいます。町家といえば、京都の町並みが知られるところですが、高田地区の町家には、京都の町並みにはない特徴があります。それは、積雪下における通行機能の確保を目的としてつくられた、町家の庇等を張り出した雁木(がんぎ)と呼ばれる私有地の通路です。現存の雁木の長さは一時期よりも短くなったといわれながらも12kmほどあるといわれています。私有地の連続により、冬の歩道確保がなされるということは、生活に根ざした文化そのものといえます。

しかし、他の地域と同様に、高田地区の雁木町家においても多くの空き家が問題となっており、それは、空き家や空き店舗の問題に加えて、雁木町家に係る文化等の保護・継承という問題として上越市の課題として挙げられているところです。

(2) 地域連携活動「ヨリ・ミチまちや」

「ヨリ・ミチまちや」^{注1}とは本報告の地域連携活動の名称です。「社会に開かれた教育課程」「地域とともにある学校づくり」が目指されていることから、地域に学び、地域と学ぶことにつながる地域連携は教員養成課程在籍学生にとっての課題ではないか、大学における教育研究活動とその活動の場を共創拠点の推進の方向ではなく、大学における教育研究活動とその活動の場として位置付けたいと考えておこなっている活動です。具体的には、放課後の小学生を対象に、教員と学生が協働で実施するものづくりや生活に係る体験的活動の場を雁木町家の空き家を拠点として約半年開設しました(図1)。



図1 「ヨリ・ミチまちや」外観と雁木

活動メンバーは美術教育、技術科教育、特別支援教育、家庭科教育の教員と大学院生、学部生からなります。

教員はそれぞれの専門とする領域を背景として、それぞれの願いを織り込みつつ、教育実践としての活動をおこなっています。学生は各教員の所属の学生が中心になりますが、所属コースがまだ決まっていない1年次学生もそれぞれの希望に応じて参加しています。

3 「ヨリ・ミチまちや」2023年度実践について

(1) 年間スケジュールなど

2023年度の活動は図2のような流れです。活動期間の前半はアートやものづくりの活動を、後半は生活の営みに係る体験的活動を軸にして組立て、参加者を募集しました(図2)。募集趣旨などに保護者の同意が得られた児童が参加者です。開催は1か月に2回で、水曜日または金曜日のいずれかの曜日を選択して参加します。各曜日の活動時間は16:00~17:30頃です。参加児童はそれぞれ12~13名、学生は授業等の予定を考慮し、各自で参加日時を決定します。教員も学生も教科等を越えて連携し、おこなうことも活動の特徴の一つです。教員と学生は14:00頃から準備をし、18:30頃までに片付けと振り返りをおこないます。

2023年度の実践：年間スケジュール

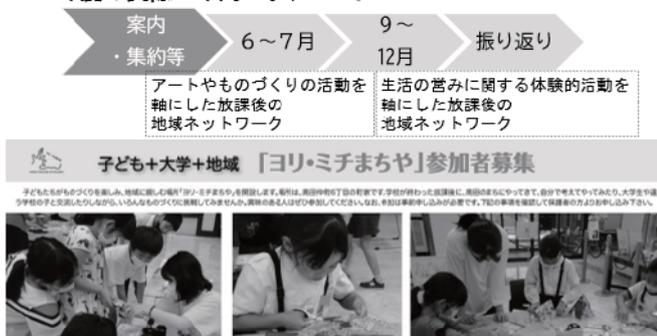


図2 2023年度の実践と参加者募集案内(抜粋)

(2) 生活の営みに関する体験的活動の例

- 11月実践：切り干し大根・干し柿 -

雁木町家の雁木に大根を干すことは、雪深いこの地域において、冬の備えの一つであり、冬の風物詩ともいわれています。また、雁木町家の庭に植えられた柿を干す様子もみられ、いずれも生活に根ざした知恵であり、文化であることから、その体験をおこなうこととしました。

雁木でみられる干し方を地域の方に教えていただき、児童と学生がペアとなってつくりました(図3)。



図3 切り干し大根づくりの様子

また、切り干し大根・干し柿づくりのまとめの一部として、写真絵本『干し柿』(写真・文 西村豊)を児童が読み語る活動を取り入れました(図4)。なお、児童がつくった切り干し大根と干し柿は家庭に持ち帰らせました。



図4 切り干し大根・干し柿づくりの様子

(3) 「切り干し大根・干し柿づくり」の評価

活動を参加者がどのように捉えていたかに関する調査を2023年12月~2024年2月にGoogleフォーム無記名回答にて実施しました。対象は児童19名(2~5年生)と学生6名でした。回答者数は各15名、5名であり、回答率は78.9%、83.3%でした。調査項目は「切り干し大根と干し柿」体験について、楽しかったか、またやってみたかなどであり、児童2項目、学生4項目でした。

児童の15名中14名は活動を楽しく、またやってみよう活動と回答していました。その理由には「うまくできて、甘くておいしかった。」「町の雰囲気がよくなるので、みんなで作るすのはよいと思った。」などがあげられていました。学生は全員が楽しく、またやってみよう活動と回答していました。学生は、活動を先人の知恵や生活の文化を子どもが学習する大切な機会と捉えていました。また、活動は学生自身が生活や学習内容や方法について学ぶ機会でもあり、地域や生活の捉え直しの機会として位置付けていました。さらに、活動そのものだけでなく、それを取り巻く環境までにも考えを広げていました。このことから、地域課題を意識し、地域を場としておこなった本報告における地域連携活動は教員養成大学学生にとって、教育内容、教育方法への気づき、生活する(私)としての気づきを得る機会になり得るのではないかと考えられました。

4 おわりに

雁木町家の空き家は社会変化により、まちの中に生まれた隙間ともいえるでしょう。教員養成系大学に学ぶ学生がその隙間に身を置き行なう地域連携活動は、学校と家庭(≒日常生活)の隙間をつなぐ契機、学校教育と日常生活をつなぐことになり得るとともに、教員養成教育の一つのあり様としての可能性をもつものと考え、これからも活動を継続していきたいと考えています。

注釈 1 活動は美術科教育の五十嵐が行っていた放課後の小学生を対象としたヨリ・ミチ図工室を発端とし、2022年度に家庭科教育の佐藤が加わり、ヨリ・ミチ図工室+αという形で、2023年度には技術科教育の東原と特別支援教育の藤井が加わりました。この年にはじめて、空き家の雁木町家をお借りし、ヨリ・ミチまちやという名称で活動を展開しました。

事務局からのお知らせ

1. ホームページのアドレスが変更になりました。

新ホームページ URL : <https://ss1.xrea.com/seikatsunet.g3.xrea.com/>

2. 学習交流会等への活動補助費の支給について

本ネットワークでは、各都道府県での学習交流会・講演会・勉強会等の活動を支援しております。本年度も例年どおり活動補助費(1万円)を支給しております。希望される場合は事務局までお申し出ください。

3. メーリングリスト (ML) へのメールアドレス登録について

情報発信・交換等に ML を活用ください。総会や学習交流会、各関連団体からの研修会等の案内や会員同士の意見交換等並びに事務局からの連絡を行っています。ML に登録することで各種情報を、添付ファイルをつけて配信することができます。ML へのメールアドレス登録及び変更は、事務局 (seikatsu_nt@yahoo.co.jp) までお願いいたします。

ML アドレス : seikatsunetmail-ml.seikatsunet.com@ml.seikatsunet.com

4. 新版ビジュアルパンフレット (2019 年 4 月版) について

新版ビジュアルパンフレットは、新学習指導要領への対応及び資料を更新するなど大幅な改定を行い、内容を充実させています。家庭科、技術・家庭科の学びの重要性を理解していただく資料として活用いただいております。パンフレットがご入用な方は事務局までご連絡ください。なお、HP にパンフレットのデータが掲載されています。ご自由に印刷してお使いください。

5. ニュースレター送付先住所の変更について

勤務先の異動、引っ越し等でニュースレター送付先住所が変更になった場合はお早めに事務局までご連絡ください。なお、送付先は、原則自宅住所でお願いします。

6. 年会費の納入について

年会費(個人会員 1,000 円)をまだ未納の方は 3 月 15 日までに会費納入をお願いします。

【振込先】 加入者名:「生活の学びのネットワーク」

- 払込取扱票ご利用の場合: 口座番号 00170-9-358470
- ゆうちょ銀行口座から振込の場合: 口座番号 00170-358470
- 他金融機関から振込の場合: 019 当座 0358470

7. 退会届の提出について

退会される場合は「退会届」の提出をお願いしております。ホームページに「退会届」の書式が掲載されておりますので、ご記入の上、メール添付か事務局への郵送でご提出ください。なお、年度ごとの退会となりますので、年会費をお納めの上、退会をお願いします。

会員継続のお願いと新規入会のお誘い

★日頃より、本ネットワークの発展のために、ご協力、ご尽力いただきありがとうございます。そろそろ次期学習指導要領改訂に向けての動きが見えるようになってきました。今年度提案した要望書の内容が反映されることを祈ります。これからも、皆様のお力添えをいただきながら、生活やものづくりの学びの意義と授業実践の成果を発信・共有してまいります。どうぞより多くの方が、本会の趣旨に賛同いただき、入会してくださることを期待しています。会員の皆様の所属しておられる学会、部会等でも、お声掛けをお願いいたします。

世話人代表 鈴木 明子

生活やものづくりの学びのネットワーク 春の学習交流会

地域を見つめる 技術科・家庭科 の学びをつくる



ZOOMによるオンライン開催

(事前申込制)

参加申し込みの締切りは、3月7日です。

参加費無料

開催日

2025年
3/15
sat

開催趣旨

社会課題が山積する現代において、地域社会との連携は学校教育にとって不可欠です。地域課題を理解し、解決策を考え、実践する力を育成することで、地域社会に貢献できる人材を育てることが可能です。

地域に開かれたカリキュラムは、学校教育と地域社会が共に未来を創造するための重要な取り組みです。地域社会との連携を深めるためには、カリキュラムに地域課題を取り入れ、地域住民との交流を促進する必要があります。本学習会では、地域に開かれたカリキュラムを実際に導入している学校を紹介し、その取り組みや成果を共有します。

参加者との意見交換を通じて、地域に開かれたカリキュラムのさらなる発展に向けて、今後の展望を共有し、共に未来を創造していくための議論を深めたいと考えています。

報告内容

1

地域教材を題材にした問題解決型調理実習プログラムの実践

茨城大学教育学部附属小学校 教諭 直井 裕紀氏

茨城県の特産物である干し芋の地域課題を教材とした問題解決型調理実習プログラムの実践を報告します。

2

日本のコメについて考える

大東市深野中学校 元教諭 赤木 俊雄氏

学校の空き地を農園にするところから始めたコメづくりの実践です。授業でのコメづくりはJA、農家、地域の協力が実践を支えました。その様子について報告します。

3

地域と創る家庭科教育

広島県立三次青陵高等学校
教諭 赤木 由美氏 教頭 伊藤 佐和子氏

高等学校と地域組織との関係づくりと家庭科での取組（保育実習や人形劇の会、地域交流会等）や、地域組織と家庭科との連携について報告します。

※実践報告の後、3グループに分かれてディスカッションを行う予定です。

時間

13:30～16:00

開場 13:10～

お申込み

参加を希望される方は、3月7日までに以下のフォーム、またはQRコードからお申し込みください。

<https://forms.gle/FKiYpVvT4DR8GEGr5>

参加方法は、後日ご案内します。



お問い合わせ

生活やものづくりの学びのネットワーク事務局

E-mail : seikatsu_nt@yahoo.co.jp

webサイト : <https://ss1.xrea.com/seikatsunet.g3.xrea.com/>

*上記の画像は、ICTを用いたジグソー法の授業風景です。題材の地域課題を調べ、まとめたものを班員に発表しています。